ネルヴァル『東方の旅』に挿入された四つのエピソードについて

善　家　明　宏

1851年に出版された『東方の旅』は，1843年のほぼ一年を費やしたネルヴァルの東方旅行の集大成である[1]。この『東方の旅』は，ネルヴァルの日々の生活が描かれた旅日記と四つのエピソードから構成されている。すなわち，『東方の旅』の四つの章，「序章」，「カイロの女」，「ドルーズ族とマロ族」，「ラマダンの夜」には，それぞれエピソード「ポリフィルスの夢」，「ピラミッド」，「カリフ・ハケムの物語」，「朝の女王と精霊の王ソリマンの物語」が挿入されている。

従来，この四つのエピソードは，まとめて論じられたことがほとんどない[2]。最初のふたつのエピソードは，取り上げられることはまれであるし，後のふたつのエピソードも『東方の旅』から独立した物語として読まれてきた。また，四つのエピソードの関係が，論じられる場合も，これら四つのエピソードは，共通の神話，すなわち最愛の女性（女神イシスの化身）との結婚という神話のヴァリアントと見做されてきた[3]。

これらのエピソードに共通要素を見出し，テーマの類似性を指摘することは確かに出来るが，この小論は，エピソードの共通要素に言及しながらも，その類似性よりもむしろ，エピソード間の差異に注目し，その相互関係を再考するものである。

そこで，その手掛かりとすべきは，各々のエピソードに於ける「夢」と「現実」の扱い方である。

1. 「ポリフィルスの夢」に於ける夢

このエピソードでは，恋するポリフィルスとポリアの夢が描かれる。ポリフ

ィルスとポリアは，互いに愛し合いながらも，彼らの身分の違いは，二人の結婚を許さない。そこで，ポリフィルスは，この世での結婚を諦め，死後の結婚を願うのである。天上での結婚を待つ間，ポリフィルスとポリアは，毎夜，夢の中でウェヌスが祭られるシテール島に巡礼し，そこで，二人は精神的に結ばれる。

この「ポリフィルスの夢」は，例えばマリー＝ジャンヌ・デューリーが指摘するように[4]，ネルヴァルの心を長い間占めていた作品であるのだが，我々は，『東方の旅』のなかで，（そして，この小論では，特に各エピソード間の関係のもとに）このエピソードを再検討しなければならない。

ポリフィルスの見る夢には，ネルヴァルに特有の《syncrêtisme》（女神イシスと聖母マリア，ウェヌスの同一視）や，時空間の超越（それに『ファウスト』[5]のワルプルギスの夜が二重写しになる）が表れるが，この夢に対するネルヴァルの態度は，両義的である。

> 私はあなたと同じく彼を信ずるものであり，ポリアがその炎を新たにし，ポリフィルスがその荘厳なる宮殿を，観念の中においてキュテラの岩上に再建した天上の愛を，彼らとひとしく信ずるものでもあるのです。（p. 237[6]）

このように，ポリフィルスの天上の恋をネルヴァルは，信じてはいるのだが，彼自身は，この夢に身を委ねることは出来ない。

> そして今，フランチェスコがそれを見ないで描いた聖なる島に降り立とうとしている私は，悲しいことに，常に，信ずるには触れることを必要とし，残骸の上に立って…過去を夢見なくてはならないという，幻想を失った時代の人間ではなかろうか。（p. 237）

「信ずるには触れることを」必要とするネルヴァルにとって，実現不可能な結婚という現実に対してポリフィルスのみる夢は，もはや手の届かない失われた「幻想」，余りにも幸福な解決法でしかない。

後述するように，「ポリフィルスの夢」に於ける夢，すなわち現実逃避としての夢は，ネルヴァルが考えるところの夢とは相容れることのないものなので

ある。それでは，ネルヴァルの考える「夢」の概念とはどういうものなのであろうか，次のエピソード「ピラミッド」のなかで見てみよう。

2. モデルとして見たエピソード　ー　「ピラミッド」

エピソード「ピラミッド」は，他の三つのエピソードとは異なり物語の体裁を取ってはいない。すなわち，ピラミッドでの秘儀入門者の試練が語られるこのエピソードは，この話をするプロシャ人の士官とネルヴァルとの会話から構成されているのである。さらに，ここで語られる入門者は，特定の人物を示しているのではなく（ここで言及されるモーゼやオルフェウスも入門者のひとりに過ぎない[7]）匿名であり続けるのだ。従って，このエピソードは，秘儀入門を受ける者全てにとって一種のマニュエルを成していると言えよう。それでは，この秘儀入門はどのような試練から成り立っているのかを次に見てみよう。

入門者は，先ずピラミッドの中に降りて行き彼の前に立ちはだかる男達を打ち倒し，火の森を突っきり，川を泳ぎ渡らなければならない。これが試練の第一段階の物質的（すなわち，現実における）試練である。この試練を乗り越えた入門者は，イシスの像が安置されている神殿に辿り着くことが出来るが，まだイシスの姿は入門者にはヴェールで隠されたままである。次に，入門者は，地下に住む祭司との問答や祈り，断食などから成る精神的試練を受けなければならない。この試練を経て初めて入門者は，ヴェールの下のイシスが入門者の最愛の女性，理想の女性の姿をとって動き出すのを見，これを手に入れることが出来る。イシス，すなわち最愛の女性を手に入れた入門者は，最後に予期しない試練を受ける。それが創世記で語られる林檎の試練である。以上述べたように，「ピラミッド」で語られる秘儀入門の試練は，大きく三つに段階づけられるのである。

それでは，次に「ポリフィルスの夢」をここで示された試練に照らし合わせてみよう。ポリフィルスは，彼の目指す目標（ポリアとの結婚）の障害（社会的身分の違い）に対して現実の領域において無力のままである。

> 彼らは人ごみにまぎれて，甘く物悲しいまなざしを交わしあうのだった。「修道士さま，死なねばなりませぬ！」——「修道女よ，死なねばならぬ！」なぜなら，この世の鎖にしばられている時はもう長くはないからだ…互いの微笑はそう言って

いた。（p．239）

彼は，試練の第一段階を乗り越えることが出来ない。「ピラミッド」に於ける試練の段階に従えば，入門者は，彼の目指す対象（イシス）に対して先ず現実に於ける障害を乗り越えねばならないのである。それゆえ，現実に於いて無力なポリフィルスと，彼の描く現実逃避としての夢は，ネルヴァルには，共に受け入れることの出来ないものとして映るのである。入門者にとっての夢（イシス）とは，決して現実から遊離した幻想ではなく，現実の試練，そして精神的試練を乗り越え，現実と一致（入門者が地上で最も愛した女性とイシスとの一致）すべきものなのである。（入門者が予期しない最後の試練とその意味については，後に述べることにする）

それでは，残りふたつのエピソードを，この「ピラミッド」で語られる試練のモデルに照らしてみよう。

3. 現実に於ける試練 ― 「カリフ・ハケムの物語」

このエピソードにおけるふたりの登場人物ハケムとユースフの関係，すなわち「分身」《double》のテーマについては，以前から，たびたび言及されてきた[8]。ここでは，この「分身」のテーマも含めて，このエピソードを「ピラミッド」のモデルのもとに再検討をする。

エピソード「カリフ・ハケムの物語」では，ハケムの社会の掟に反する妹セタルムルクへの恋が語られる。

> 私は…恐ろしいことだ…妹を恋している！　ところが不思議なことに，掟に反したこんな心の傾きについて，いささかも罪を感じない。どんなに自らを罰そうとしても，罪を許してしまう神秘的な力が自分の中に存在しているのが分かる。
> (…) それは，(…) 神ならば抱くことの出来るような恋だ。（p．531）

この社会の掟という現実に於ける障害に対してハケムは，ポリフィルスとは異なり，この障害を乗り越えようとする。すなわち，地上において自分の神性を示そうとするハケムの意志は，彼自身は人間の法にとらわれない神となることによって，妹セタルムルクへの愛を成就するためのものであると解釈出来よ

う。

このハケムの意志は，先ず宰相アルジェヴァンを倒すことに向けられる。彼の宰相アルジェヴァンは，この国の実権を握り，策謀によって飢えを引き起こし民衆を苦しめている。ハケムは，アルジェヴァンから権力を奪い返すことによって自分の神性を確かめようとするのであるが，逆に狂人としてモリスタン牢に閉じ込められてしまう。だが，モリスタンの囚人たちと力を合わせ牢を破ったハケムは，アルジェヴァンに対し戦いを挑み，これを打ち破る。しかし，アルジェヴァンから権力を奪い返すことによって，現実に於ける試練に打ち勝ち，セタルムルクとの婚礼を準備させたハケムも，「ピラミッド」のモデルが示すようにヴェールで隠されたイシスを見出したに過ぎず，従って，夢の半分を獲得したに過ぎないのである。

そのことは，ハケム自身が準備させた婚礼の場で，彼の分身ユースフがハケムの代わりにセタルムルクと結婚するのを，ハケムはただ手を拱いて見ていなくてはならない，という場面が表している。その時，ハケムには，次のような考えが去来する。

> 本物のカリフが結婚しようとしていたセタルムルクと，幻のカリフが結ばれるという成り行きは，何か不可解な謎，神秘的で恐ろしい象徴を秘めているのではなかろうか？　これはセタルムルクをその兄から奪い，宇宙律と恩寵によって定められたカップルを引き裂いて，天をかすめとろうとするなんらかの嫉妬深い神なのではないか？（p. 557）

ハケムにとって，彼の分身ユースフと最愛の女性セタルムルクとの結婚は，「不可解な謎，神秘的で恐ろしい象徴」と映るのであるが，これを「ピラミッド」のモデルとの関連から見れば，この謎とは正に，彼にはまだヴェールで隠されているイシスの真の姿と解釈することが出来よう。

従って，ハケムにとって夢と現実は，未だ統合されることなく矛盾した状態のまま存在していると言える。そして，このハケムに於ける夢と現実の分裂状態こそが，ハケムからユースフという分身を生み出したのである。

ユースフは，ハシッシュの酔いが見せる夢の中でしか最愛の女性（それはセタルムルクなのであるが，彼は彼女の素性を最後まで知らない）に会うことが

ない。少なくとも，彼女との出会いが果たして現実の出来事なのか，夢の中でのことなのか最後まで確信を持つことが出来ない。

> 時には，こんなことはみな，この偽りの草の幻想じゃないかって思うこともある。(...) だから，今じゃもう，夢か現実かを区別することもできないんだ。(p.544)

逆に，ハケムは，彼の愛する存在が現実のものであることは分かっているが，ユースフとセタルムルクとの結婚の場面に臨んだ時，自分自身の実在性を失ってしまう。

> 彼女たちは，カリフには気づかない様子だ。宮殿の戸口には，(...) 奴隷や小姓が大勢いた。しかし，彼らの傍らを歩き，肘にさわったりさわられたりしても誰も少しも彼の存在には気がつかない。その奇妙な現象に，彼はひそかな不安を覚えはじめた。亡霊や見えない精霊の状態に移行したような気がした。 (pp. 556－557)

つまり，ユースフは，最愛の女性との結婚という現実に際しても現実認識を持ち得ず，ハケムは，夢が正に現実になろうとする時，彼自身の実在性を喪失してしまうのである。ユースフは非現実から現実へ，これとは逆にハケムは現実から非現実へとその立場を交換するのであるが，彼らはいずれもこのふたつの領域を統合することは出来ないのである。

4. 精神的試練 ― 「朝の女王と精霊の王ソリマンの物語」

最後のエピソード「朝の女王」は，ハケムの物語が終わった所，現実と夢の矛盾状態から始まる。

エルサレムの王ソリマンと芸術家アドニラムは，シバの女王バルキスを愛するライヴァル関係にある。ここで，アドニラムにとって現実に於ける障害は，女王と職人という身分の違いになるのだが，アドニラムは，ソリマンとバルキスの前で彼こそ真のエルサレム王の資格があることを示す。

この男が手で合図をしただけで，大軍が生まれた。わしの人民は彼のものだ。わしが支配しうるのは，廷臣と祭司たちの情けない集団だけになってしまった。この男が，眉ひとつ動かせばイスラエルの王にもなれるだろう。（p. 699）

ここにおいても「カリフ・ハケムの物語」で見られた二人のカリフ（王）という分身のテーマが現れる[9]。ハケムには理解することが出来なかったこの謎は，引用で触れたように「嫉妬深い神」に対する疑惑になるのだが，一方,「朝の女王」には，聖書でそしてソリマンによって嫉妬深いと形容される神アドナイがいる。従って，アドニラムのアドナイに対する反逆の意志は，この謎を解き明かすことによって夢と現実の矛盾状態を解消することを意味していると言えるのである。

アドニラムにとって精神的試練とは，地下世界に降りて行き，そこで彼の祖先から啓示を受けることである。この啓示によって，彼は，人類に知恵を授ける恩人でありながら常に迫害を受けなければならないエブリス（サタン）の子であるカインの種族と，無能でありながら高慢なアドナイの子孫との間に起こった最愛の女性をめぐる戦いが，それ以後地上でも繰り返されることを知る[10]。カインは，アドニラムに次のように語る。

しかし，そなたの知らないことがある。それは，私の種を断とうとしたアドナイが，劫罰として，私を愛していたわれらの妹アクリニアを若いアベルに花嫁として与えたということだ。そこからジン，すなわち火の元素から発したエロヒムの子と，泥土から生まれたアドナイの子らのあいだの最初の戦いがおきたのだ[11]。(p. 724)

こうして，アドニラムは，才能に於いて勝り，またエルサレムの実際の王でありながら，アドナイの無能な僕（しもべ）ソリマンによってエルサレムの王位を簒奪され，今またバルキスを奪われようとしていることの意味を知るのである。精神的試練を経て，この謎（嫉妬深い神アドナイに対する疑惑）を解き明かしたアドニラムは，「ピラミッド」のモデルが示す通り最愛の女性バルキスを手に入れ，夢と現実を統合することが出来るのである。

5. 最後の試練 ― 「永遠性」の概念

精神的試練を経て，最愛の女性を得たピラミッドの入門者も，先に触れた最後の試練を受けなくてはならない。この林檎の試練が何を意味しているのかネルヴァルは明らかにはしていないが，「朝の女王」のエピソードとの関連から見ればそれを推察することが出来よう。

神の言葉に背き禁断の木の実を食べたアダムとイヴは，死すべき者となる。一方，「朝の女王」の後半は，明らかに「永遠性」をテーマとしている。最後に，三人の職人によって暗殺されてしまうアドニラムは，しかしながら，バルキスから彼が永遠の生を得るであろうことを予言される。

> 精霊らの神託と一致した私の夢，私の予感は，私たちの種族の永続の確信を与えます。そして私は私たちの結婚の貴重なしるしを一緒に持って参ります。私たちをもう一度生まれさせ，イエメンと全アラビアをソリマンの後継者らの弱い軛から解放してくれる運命の子を，あなたの膝は抱くでしょう。（p. 756）

アドナイに対する反逆者という運命を成就しようとするアドニラムは，個別存在としての生は失うが，バルキスとの間に種族の精神を継承する子供を儲けることによって種族としての永遠の生を得る。すなわち，己の創造主エブリスに忠実なアドニラムは，個別存在としての永遠性を失うことによって逆説的に種族としての永遠性を得るのである。

これに反して，バルキスを奪われたソリマンは，自分の創造主アドナイを裏切り，偶像崇拝に走る。その結果，個別存在として永遠の生を得ようとするソリマンの企ては，一匹の壁蝨によって脆くも崩れ去ってしまうのである。

以上のことから，最後の試練は，創造主に対する信仰の遵守を問い，この試練に打ち勝った者は，種族の精神として子孫のうちに蘇り，永遠の生を獲得することを意味していると言えるであろう[12]。

6. 結び

これまで述べてきたことを，まとめると次のようになる。

入門者	（Ⅰ）現実的試練	（Ⅱ）精神的試練	（Ⅲ）最後の試練
ポリフィルス	⟶ 現実に於ける無力		
ハケム		⟶ 夢と現実の矛盾	
アドニラム		⟶ 夢と現実の統合	⟶ 永遠性

『東方の旅』に挿入された四つのエピソードは，（「ピラミッド」で言及されるオルフェウスを特権化する場合には，なおさらそう思われるように）最愛の女性との結婚とその挫折というテーマの単なるヴァリアント，繰り返しとはなっていない。これらのエピソードのうち「ピラミッド」の秘儀入門をモデルとして，他の三つのエピソードは，このモデルに従って段階的に発展していく物語となっていると言うことが出来よう。さらにこのことから，最愛の女性との結婚というテーマも，それがエピソードの目指す究極のテーマではなく，その彼方にもうひとつのテーマ，すなわち「永遠性」というテーマを持っていることが分かる。最後に三人の職人によって暗殺されるアドニラムを，愛する者と結ばれることがないポリフィルスやハケムと同一視することは出来ない。このアドニラムの死は，最愛の者との結婚を成し遂げた後，彼の子孫のうちに永遠の生を得るための必然的な契機なのである。

この四つのエピソードで展開される三つの試練の要件こそ，『東方の旅』全編を通してネルヴァルが追求した問題であるように思われる。そして，そのことを確かめるためには，今一度『東方の旅』のエピソードと旅日記の関係を検討し直す作業が必要となろう。

註

1）ただし，「序章」の＜I．ジュネーヴ街道＞から＜X．日記.(つづき)＞までは1839年のウィーン旅行の体験を利用したものであり，真の東方旅行は＜XI．アドリア海＞からはじまる。

2）『東方の旅』全般を論じたものとして，Gérald SCHAEFFER, *Le Voyage en Orient de Nerval,* La Baconnière, 1967. がある。

3）*Ibid.*, p.26.

4）Marie-Jeanne DURRY, *Gérard de Nerval et le Mythe,* Flammarion, 1956, pp. 107－108.

5）ネルヴァルは，1827年『ファウスト』第一部を，また1840年にはその第二部を翻訳出版している。特に，第二部翻訳の際書かれた序文で，ネルヴァルは，ワルプルギスの夜に注目している。

6）使用したテクストは，*Voyage en Orient* in *Œuvres complètes*, t. II, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1984. 引用の日本語訳は，筑摩書房の『ネルヴァル全集II』及び国書刊行会『東方の旅』の訳文を参照させていただいた。

7）シェーファーは，オルフェウスにエピソードの登場人物のモデルという特権を与える。*Op.cit.*, p.26.

8）例えば，Ross CHAMBERS, *Gérard de Nerval et la poétique du voyage,* José Corti, 1969, pp. 223－227.

9）シェーファーも，アドニラムとソリマンの類似性を指摘している。*Op.cit.*, p. 37.

10）ここで示されるアドナイとエブリス（サタン）についての善悪の価値の相対化は，ネルヴァルに於ける狂気／理性の相対化と通底しているように思われる。（Cf. *Lettre à Madame Alexandre Dumas,* le 9 novembre, 1841）。

11）ここで語られるカインとアベルの物語は，「朝の女王」のみならず「カリフ・ハケムの物語」の原型をも成していると思われる。

12）このネルヴァルに於ける永遠性の問題については，Jean-Pierre RICHARD, 《Géographie magique de Nerval》 in *Poésie et Profondeur,* Coll. Points, Seuil, 1955, pp. 81－84. を参照されたい。